

藁二斗委通信

日大理互学部斗委

藁二斗委書記局

理互学部のすべての先進的に闘う学生諸君、昨日の我々の闘いは、とりわけ理互学部一号館内における暴散なるデモンストレーションは何を意味するのか、それは我々の自治会室占拠斗争から、それをメルクマールとする9・30への選挙は、まさに「昨日の法学部でのレリカードストライキ等に象徴される様に昨日に爆発したものである。

昨日一号館内に掲げられた「補正案大学を物にとつての斗争」の綱領を出した鈴木勝の総長社任等々に見られることは、極めて当然のことながら「日大脱党事件」は「証拠不十分」をもって「不起訴」となった。そしてそれに呼応した形で総長選挙が行なわれたことに我々は注目せねばならない。すなわち、昨年の9・30以後の古田の居直りから、新専任社長、官廳、右翼による強制授業再開と続く一連の「正常化」策動の総仕上げとして為されたことは明白である。

昨年来古田体制に協力してきたことを完全に隠蔽し、破綻した論議をかすけて押しつけようとし、ロックアウトによって古田に反対する者の存在を許さなかった教授会、とりわけ現在の新古田体制の一環として存在する理互学部教授会も「正常化」の美名をもって斗争を圧殺し、教育の帝国主義的再編をもくろんでいるのだ。彼らは欺瞞的にも昨年からの「自主選挙路線」と称する一見あたかも理互学部だけが他学部と別であるかの様に装い、民主的であるかの様なペールをかぶっているのである。それは現在の日本斗争が、いや東大、早大斗争から発展した全国学生斗争が、個別的、改良的なものから全国性、政治性を獲得し、帝国主義総体との対決→社会秩序総体の変革を志向しているが故に、個別斗争における度不いりぞもってしては、絶対に解決し得ないのである。ここに、日大理互学部における「自主選挙路線」、全国学生斗争における一般的な「自主解決」の論議の殺滅性があるのだ。

また我々の斗争の質が、教授会というかなり低い次元のものでしかない時に、権力はすでに、それ以上のものまで攻撃しているのであり、それ故我々は早急に理互学部斗争を対抗教授権力斗争を貫徹することも、同時に対日豪権力、プロレタリア統一戦線への係りの中から地えかえさた行がほたらないところへとましかかっているのだ。この様に我々の斗争の質を対抗教授会から対日豪権力へと質を高めること（我々のスローガンの運動の中からの肉実化）は、我々の斗争に対する、大学立憲を尊厳とする対抗によりて必要とされていると同時に、圧倒的大衆の結果をもたらした選挙の突然暴発的成長の中から、現時点における選挙力の若干の低下と混乱を総括する守から必要とされているのである。

以上の点をふまえて我々は理互学部教授会を弾劾し、更に9・30に向けての昨日に続く我々の斗争の一環として、自治会室占拠へ向けるとして進行なれはならないのだ。

9.27

奇藤理互学部教授会弾劾 理互学部総決起集会に結集！！

12時 理互一号館三階学部長室前

9.28

三里塚斗争

9.30

全学総決起集会 2時 経済学部前